

品質・食味の良い「てんたかく81」の移植栽培基準例（JAくろべ版）

600kg穫り収量構成の目安

収 量 構 成	目 安
㎡当たり最高茎数（本）	650
有効茎歩合（％）	78
㎡当たり穂数（本）	500
平均一穂粒数（粒）	60
㎡当たり粒数（百粒）	300
登熟歩合（％）	85
玄米千粒重（g）	23.5

土壌区別施肥設計（kg/10a）

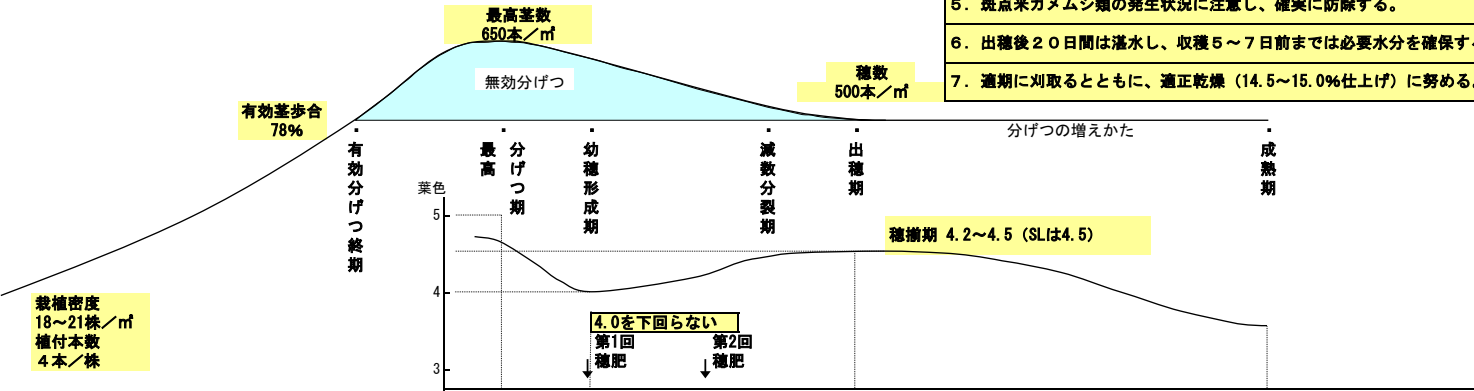
土 壌 区 分		窒 素 施 用 量			三 要 素 合 計		
		基 肥 （側条施肥）	出穂25日前	出穂15日前	窒素	リン酸	加里
沖 積	CL	3.0～4.0	1.5	1.5	6.0～7.0	7.0～9.0	8.0～12.0
	L	3.5～4.5	1.5	1.8	6.8～7.8		
	SL	4.0～5.0	1.5～2.0	2.0	7.5～9.0		
洪 積	L～CL	3.0～5.0	1.5	1.8	6.3～8.3		

栽培のポイント

1. 1箱当たり120g以下のうす播きを徹底し、良い苗を作る。
2. 施肥量は、土質や土性に応じて過剰とならないよう留意する。
3. 株数は、坪当たり70株を植え、良質の茎を早く確保する。
4. 出穂30日前から入水し幼穂形成期の葉色が4.0を下回らないよう誘導する。
5. 斑点米カメムシ類の発生状況に注意し、確実に防除する。
6. 出穂後20日間は湛水し、収穫5～7日前までは必要水分を確保する。
7. 適期に刈取るとともに、適正乾燥（14.5～15.0%仕上げ）に努める。

生育ステージの目安

田植期	幼穂形成期	出穂期	成熟期
4月30日	6月25日	7月16日	8月21日
5月5日	6月27日	7月18日	8月23日
5月10日	6月30日	7月20日	8月24日



月 日	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月		
	4/12	5/5	6/1 6/8 6/12	6/27 7/18	8/23			
生育期区分	育苗期		田植期	活着期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期 ～穂ばらみ期	登熟期
水管理	やや深水		浅水管理	入水停止→溝掘り 中干し	間断かん水	出穂30日前からの入水 (ヒタヒタ水)	出穂から20日間は湛水状態を保つ	間断かん水 (落水を急がないように)
栽培管理のポイント	● 田面の均平を図る。 ● ゆっくりと耕起し、作土15cm以上を確保する。 ● 葉いもち予防のため苗箱施肥を行う。 ● 育苗ハウスが二十五度以下になるよう管理する。 ● 一箱当たり一〇〇g以下とする。 ● 播種は田植えの二十日前に行い、播種量は十分に浸種して芽出しを確実に行う。 ● 株数は坪当たり七十株を植え、良質の茎を早く確保する。 ● 基肥量は地区基準量を守る。 ● 一株の植付け本数は四本とし、三cm程度の深さに植える。 ● 田植後はやや深水として活着を早める。 ● 活着後は浅水管理として分げつの発生を促す。 ● 田植後はやや深水として活着を早める。 ● 活力を高めるとともに、過剰分げつを抑制する。 ● 田植後一か月を目安に中干しを確実に開始し、根を六月上旬を目安に入水を止め、適度な土壌硬度を確保した上で、田植後一か月までに溝掘りを行う。 ● 葉色低下を防ぐ。 ● 出穂三十日前からの入水（ヒタヒタ水）により、土壌条件に応じ、適正量を施用する。 ● 穂肥の多量施用は玄米蛋白含有率を高めるので、穂肥は出穂二十五日前から二回施用する。 ● 幼穂形成期の葉色は四・〇～四・五に誘導する（四・〇を下回らない）。 ● 穂いもちは穂揃期に防除をする。 ● 紋枯病は穂ばらみ期に防除する。 ● 出穂から二十日間は湛水状態を保つ。 ● 刈取り予定日の五～七日前までかん水する。 ● フェーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。 ● 排水溝を掘る。 ● 稲わらの腐熟を促進するため、秋耕を行い、必ずを施すなど、地力増強に努める。 ● ケイ酸石灰は一〇アル当たり一〇〇～二〇〇kg ● 一・九ミリのふるいで選別する。 ● を厳守し、胴割米や過乾燥米の発生を防止する。 ● 適正な乾燥速度と仕上水分十四・五～十五・〇％ ● 穀の黄化率八十五～九〇％程度で適期に刈取る。							